廣野行雄先生の思い出

小　林　将　輝

本学を 2016 年に退職された廣野行雄先生が 8 月 1 日にご逝去された。コロナ禍ということもあって、ご葬儀はご家族などの近親者だけで 8 月 7 日に執り行われたが、先生と生前親しくされていて、やはり本学を退職された本間邦雄先生、吉野瑞恵先生、林好雄先生、ポール・マッカーシー先生、そして文教大学の阿川修三先生、また本学からは葉紅先生に加え、私も末席に参列させていただいた。ご葬儀の様子については、後日教授会で「廣野先生らしい心温まる集まりだった」というようなことを報告させていただいたと思う。それは少人数の式であったが、本当に温かい集まりだった。

廣野先生としたやり取りや、書かれたものを読み返すと様々な思い出がよみがえってくる。私のような若輩者が出しゃばるのは本当に憚られるのだが、原稿の依頼をいただいたので、この場を借りて私の個人的な思い出を少しだけ書こうと思う。

廣野先生と出会ったのは、私が本学の現代文化学部で働き始めた 2010 年である。ちょうど「外国語教育センター」が設立された時期で、外国語の教育はこのセンター主導で行われることになった。以前からいた外国語の先生方はセンター設立に対して、それぞれ様々な態度をとっていた。私はドイツ語の教員でもあったので、同時期に始まった委員会に出席していたが、そこには中国語担当の廣野先生の姿もあった。廣野先生は、フランス語の本間先生とともに並び立ち、何度も発言をされ、設立されたばかりのセンターに対して様々な意見を述べていた。なかには手厳しい発言もあったが、大学での教養の意義を伝えることや、教員の立場を慮ることが主旨の発言で、どの言葉の根底にも教育者としての良心や燃えるような情熱、そしてある種の信念のようなものがあったように思う。新任の私の眼には、そうした態度はとても頼もしく映ったのを記憶している。

廣野先生と親しくなったきっかけとなったのは、以前は毎年学部が行っていた新入学生のためのオリエンテーションキャンプであった。これには多くの教員も参加し、夜は懇親会となった。廣野先生は本間先生といっしょになって自慢のお酒を持ち込み、良しあしについて熱弁を振るっていた（私も負けじとワインを持ち込んだこともあったが、うん、まぁ…という反応で悔しい思いをしたものであった）。そうして、廣野先生は「第 2 外国語仲間」として、また学部の同僚として、いつも親しげに声をかけてくれるようになった。先生と仲良くさせていただけたことは、とても光栄なことだったと思っている。

廣野先生は 2016 年に退職されたが、その時、本間先生と吉野瑞恵先生も同時に退職された。私にとって現代文化学部はこの 3 人の先生方の学部でもあるように感じていたのもあって、この時はうら寂しく感じたものであった。お三方には特に何かを積極的に相談したわけではないが、ああ、私には頼る人がいなくなったという気持ちになったことをよく憶えている。

そんな私の気持ちとは裏腹に（？）、廣野先生はお勤めから解放されたからか、実に生き生きとし、とても楽しげな様子に見えた。さっそく奥様と欧州旅行に行くと言って、私にオーストリアの鉄道の予約の仕方を尋ねて来たこともあった。帰ってきたら帰ってきたで、旅行中に詠んだ句を一式、飲み仲間に一斉メールで送ってきた。私の周辺ではあまりないことで少し驚いたが、本間先生が普通に句の批評を返したので、もっと驚いたものであった。お三方が退職された後は、清瀬にある廣野先生行きつけの中華料理屋でよく集まって話に花を咲かせた。話題の中心はやはり本学の教育のことであったが、欧州

旅行後の集まりでは、件の一連の句が大いに話題になったのは言うまでもない。

廣野先生が書かれたものは、どれも教養溢れる内容で私が普段使わない言葉が並んでいる。加えてメールなどにはたいていウィットに富んだ冗談も挟まれている。おそらく書いている時にはさぞ上機嫌だったのではないか。そうしたものを読んでいると、大きな灰色の眉を下げ、困ったような顔をして「小林さんはさぁ」と、私がドイツ風ではなく日本人好みのビールを好んでいたことに苦情を言ってくる様子が思い出される。こうした先生とのやり取りを思い返すと、私自身の教員生活も楽しく、温かいものであったと自然と思えて来る。

最後に先生からいただいたメールは 2019 年であった。2 年前のことだが、読み返すとずいぶん前のような気がする。その後のコロナ禍で、先生とはとうとう直接会える機会を失ってしまった。これは本当に悔やまれる。あの優しい先生には安らかにお休みいただきたい。心からそう願っている。